様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　5月　21　日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：18720243
研究課題名（和文）　東南アジアのグローバル化とミドルクラス・アイデンティティ生成の文化論的研究
研究課題名（英文）　Cultural Analysis on the Emergent Middle-class Identity in Globalizing Southeast Asia

研究代表者
関　恒樹　（SEKI KOKI）
広島大学・大学院国際協力研究科・助教
研究者番号：30346530

研究成果の概要：近年一層顕著になる海外移住・出稼ぎによって、東南アジア、特にフィリピンにおけるミドルクラス・プロフェッショナル達のトランスナショナルな社会空間は拡大しつつある。彼らはそのような空間にて新たな財・知識・ステータスを獲得しつつあると同時に、その一方で国内諸階層との関係における閉塞感と不安を抱いている。本研究は、このような揺らぎをともなうミドルクラス・プロフェッショナルの差異化とアイデンティティ模索の実践を明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,200,000	0	1,200,000
2007 年度	1,100,000	0	1,100,000
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	330,000	3,730,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学
キーワード：フィリピン、グローバル化、ミドルクラス、アイデンティティ、文化の政治

１．研究開始当初の背景

しばしば「海外出稼ぎ立国」と称されるフィリピンは、現在 400 万人以上の海外出稼ぎ者を送り出し、世界各地に移民コミュニティを形成している。特に近年顕著な特徴は、多様な背景を持つ都市部ミドルクラス・プロフェッショナル達の看護師資格を取得しての海外移住である。フィリピンからの看護師の海外移住は、ミドルクラス・プロフェッショナルのトランスナショナルな社会空間への独自な適応過程を示している。彼らのアイデンティティ生成の動態を明らかにすることはグローバル化する世界の一側面の検討として重要である。

２．研究の目的

本研究の目的は、今日の東南アジア地域社会におけるグローバリゼーションの浸透と、その過程でのミドルクラス・アイデンティティの生成、あるいは活性化についての文化論的考察を、フィリピン人看護師の海外移住、トランスナショナル・マイグレーションに関するエスノグラフィックな事例に基づいて展開することにある。グローバル化とトランスナショナル・マイグレーションという近年の社会科学が注目する現象を考察する

際、フィリピンは興味深い事例を提供している。しばしば「海外出稼ぎ立国」と称されるフィリピンは、現在 400 万人以上の海外出稼ぎ労働者を送り出すのみでなく、「フィリピノ・ディアスポラ」と呼ばれる海外移住者コミュニティは、かつての植民地宗主国であったアメリカ合衆国のみでなく、アジア、ヨーロッパ各地に広がっている。これら「フィリピノ・ディアスポラ」を構成する海外在住者たちは、移住後も母国の地方社会と強固な物質的・心理的紐帯を維持し、そのことがトランスナショナルな人、モノ、金、情報、イデオロギーの活発な交流の空間を創出することになる。とりわけ近年の北米、ヨーロッパ諸国における労働力需要の高まりに呼応し、急激な増加傾向を示すフィリピン人看護師の海外移住という現象は、このようなトランスナショナルな空間に巻き込まれたフィリピン社会の動態を如実に示す事例である。フィリピン人看護師の海外（特にアメリカ合衆国）移住は、既に 1960 年代半ばから顕著になった現象ではあるが、近年に特有の興味深い傾向として、医師・療養士などの医療専門家が新たに看護師の資格を取って海外移住する点のほかに、医療とは無関係の専門領域を背景に持つ多くのミドルクラス・プロフェッショナル、例えばエンジニア、公認会計士、弁護士、建築家、企業のマネージャーといった人々が、看護学校へ通って看護師となり、海外移住を試みるという点が指摘できる。すなわち、今日のフィリピンにおいて看護師の資格はミドルクラス・プロフェッショナルの海外移住のための極めて便宜的な「第 2 のパスポート」であり、そうした看護師の海外移住は、フィリピノ・ミドルクラスのトランスナショナルな空間への独自な適応過程を示しているということが出来るのである。

さらに本研究の目的は、上述のような看護師の海外移住をミドルクラス・プロフェッショナルのアイデンティティ構築のための文化的実践として位置付け、議論することである。先述した如く、ミドルクラスの海外移住とは母国社会と切り離された現象ではなく、人々は出国後も頻繁に母国を訪れ、海外に在住しつつも母国の親族・友人との間に様々なモノ、情報、知識の交換を通したネットワークを維持する。さらに、この様なトランスナショナルな空間における相互作用の結果、海外と母国社会双方のミドルクラスの間に、新たな「ライフスタイル」の生成が見られることが考えられる。ここでの「ライフスタイル」とは、消費、教育、趣味・嗜好など社会生活の様々な局面に関する価値付けによって構成される差異の体系であり、自らの社会的ステータスの誇示やアイデンティティの確認に結び付く文化的実践であると規定できる。本研究では、トランスナショナルな空間においてミドルクラス・プロフェッショナルが、どの様な「ライフスタイル」の実践を試み、階層・階級的アイデンティティを構築しているのかを明らかにする。

本研究においては、ミドルクラスを生産様式に基づく政治経済的概念として捉えるよりも、むしろそれを文化的構築物として捉える視点を提示したい。すなわち、本研究におけるミドルクラスとは、いくつかの客観的指標によって同定される実体的存在であるよりは、むしろ様々な異階層集団の間における自己表象と他者表象のせめぎあい、あるいは自集団と他集団相互の間の象徴的境界の構築と日常レベルでの微細な差異化の実践の過程で浮かび上がってくる概念として捉えられる。その様な存在としてミドルクラスを捉える時、その階層・階級的アイデンティティも固定的・静的な実体として捉えることは出来ず、むしろ異なる階層集団間で様々な対抗的アイデンティティ相互の交渉、抗争の中から浮かび上がってくる極めて動的な概念として考える事が出来よう。この様な異階層間の微細な交渉過程は、しばしば「文化の政治学」として概念化されるが、本研究は近年の海外移住によって新たな財・知識・ステータスを獲得しつつあるフィリピンのミドルクラス・プロフェッショナルたちの階層的・階級的アイデンティティ模索の実践を、このような「文化の政治学」、すなわち様々な異階層からの対抗的アイデンティティとの交渉・せめぎ合いに注目しつつ明らかにしてゆくことを目的とする。

特に本研究では、近年のグローバルな人の移動によって拡大しつつあるトランスナショナルな社会空間が、いかなる差異性と共同性によって構成されているか、またそこに生成しつつある社会的ネットワークと紐帯の性格はいかなるものかという点を、フィリピンのマニラ首都圏のある住民互助組織の事例から考察することを目的とした。

３．研究の方法

本研究は基本的に文化人類学的フィールドワークによる一次資料収集と、文献・統計などの２次資料収集によって構成される。具体的には、海外出稼ぎ労働者、移住者を数多く輩出するマニラ首都圏のコミュニティにて、海外出稼ぎ経験者、その家族、またこれから出稼ぎ、移住を計画している人々などにインタビューを試みた。インタビューでは住民の母語であるフィリピノ語を使用した。

フィリピン人看護師の海外移住に関する現地調査はマニラ首都圏各地にて行われた。主な調査方法としては、ケソン市内の看護学校において、2 クラス（受講生合計 107 人）、マニラ市内の看護師国家試験用レビュー・スクールの 1 クラス（受講生総数 156 人）に質

問紙を配布し、彼らのプロフィール、海外移住に関する基礎的情報などを記入してもらった。さらに回答者の中から職種、年齢、性別などに基いてインフォーマントを選出し、45 ケース（個人、夫婦、複数のキョウダイ夫婦など）のインタビューを行なった。その他、海外就労に関る主要政府機関や調査機関、例えば POEA、CHED、TNS Trends, Social Weather Stations などから関連資料を取り寄せた。

４．研究成果

最終的に本研究は、当初の目的・計画を若干軌道修正し、トランスナショナルな社会空間に巻き込まれたフィリピン首都圏マニラにおいて、二つの社会階層、具体的には都市貧困層とミドルクラスに焦点を置き、それらの社会階層を構成する人々のアイデンティティを明らかにすることを試みた。特に、家族の生活のための「自己犠牲」として語られる都市貧困層達による海外出稼ぎと、「差異化・卓越化」のためのミドルクラス・プロフェッショナル達の海外移住という対照的なトランスナショナルな社会空間への適応過程に注目しつつ、両者の差異と同一化の社会的実践から生成するアイデンティティを明らかにすることを試みた。

調査地マニラ首都圏マリキナ市における都市貧困層を中心とする住民互助組織は、海外出稼ぎ労働者とその家族に対して、コミュニティ的紐帯に基づく様々な支援を提供する。この住民互助組織は、いくつかの NGO との協働関係を維持することで、海外出稼ぎ労働者の福利厚生の向上という一定の社会改革を実現する勢力との回路を確保している。しかしながらこのような地域住民互助組織と諸 NGO との共同性とは、拮抗しあう規範、価値、アイデンティティを内包するものであり、利害の対立あるいは差異と綻びを抱えつつ、状況適応的に一時的にせよ維持される緩やかな連帯としての性格を持つものであった。フィリピンに残る家族の生活のための「自己犠牲」として語られる地域住民組織メンバーたちの海外出稼ぎと、「差異化／卓越化のための移動」として捉えることが可能なミドルクラス・プロフェッショナルたちの海外移住は、非常に対照的な意味を持つ移動である。このような諸階層の移動によってもたらされるトランスナショナルな社会空間の拡大は、均一のトランスナショナル公共圏を帰結することは無く、むしろ新たに獲得された財、知識、ステータスを資本とする文化の政治を助長しつつ、諸階層間の差異化の再生産と社会的絆の分散化、社会関係の断片化をもたらす。このような状況の中で、トランスナショナルな社会空間に足場を確保しようとする諸階層が、フィリピン国内において一時的にせよ重なり合う利害、打算、思惑によって、一定の共同性の構築を可能にしていることを示すことを試みた。

住民互助組織メンバーの都市貧困層は、NGO メンバーたちに「外部者」、「エリート」として反感や不信を抱きつつも、より専門的な知識や政治家やメディアと交渉するスキルなどが欠如するために、NGO と協働せざるを得なかった。一方、NGO を構成するミドルクラス・プロフェッショナルたちは、一様に都市貧困層をはじめとする「同胞フィリピン人との連帯」を語る。しかしこのような連帯の語りは、トランスナショナル空間に複数オプションを広げつつ、差異化／卓越化のための海外移住を試みるミドルクラス・プロフェッショナルたちの戦略を支える資源として利用される側面を無視することはできない。このように、確かに都市貧困層たちのコミュニティ的紐帯は、NGO を媒介として、政府、メディアなどの外部諸アクターと結びつき、そこには海外出稼ぎ労働者にとっての一定の社会改革をもたらす共同性が生まれていた。しかしながらこのような共同性は、絶えず諸階層間の排除と包摂、差異化と同一化という相反する 2 局面が共存するという意味で、常に綻びと複数性を内包する共同性として成立するのである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

(1)関 恒樹、「グリーン・ネオリベラリズムとエイジェンシーの共同体-フィリピンの海域資源管理の事例から」、『文化人類学』(日本文化人類学会)、査読有、73 巻 4 号、2009、477－498 頁。

〔学会発表〕（計７件）

（１）Seki, Koki ”The Accidental Scholar as Activist: From Ecocolonialism to Effective Transnational Alliances in Palawan’s Environmental Movement” (Poster Presentation at Society for Applied Anthropology, 69th Annual Meeting, March 17-21, 2009, Santa Fe, New Mexico, Co-authored with Rebecca L. Austin, Noah Theriault, Dante Dalabajan, Dario Novellino, Wolfram Dressler, Michael Fabinyi, Melanie Hughes McDermott, and Nicole Revel), USA.

（２）Seki, Koki ”Coastal Resource Management, Emergent Community, and Alternative Public Sphere: A Case of Palawan, Philippines″, (presented at 8th International Conference of Philippine Studies, 23-25July 2008, Philippine

Social Science Center, Metro Manila, Philippines)

(3)関　恒樹、「トランスナショナルな社会空間における差異と共同性の生成－マニラ首都圏のOCW 互助組織の事例から－」(第 13 回フィリピン研究会全国フォーラムにて発表、2008 年 7 月 6 日、同志社大学)

(4)関恒樹、「トランスナショナルな社会空間における差異と共同性の生成－フィリピン・マニラ首都圏の事例から」(日本文化人類学会第42回研究大会にて発表、2008 年 5 月 31 日、京都大学)

(5)関　恒樹、「『資源管理の人類学』試論―フィリピンの海域資源管理にみる統治性、主体、共同性」(第 205 回東南アジア学会中部例会にて発表、2007 年 10 月 6 日、名古屋市立大学)

(6)関　恒樹、「環境をめぐる制度、行為主体、社会的実践―フィリピンの海域資源管理の事例から」(日本文化人類学会第 41 回研究大会にて口頭発表、2007 年 6 月 3 日、名古屋大学にて)

(7)関　恒樹、「環境をめぐる制度と社会的実践―フィリピンの海域資源管理の事例から」(日本オセアニア学会第 24 回研究大会にて口頭発表、2007 年 3 月 20 日、三保園ホテルにて)

〔図書〕(計 1 件)
(1)関　恒樹(単著)『海域世界の民族誌―フィリピン島嶼部における移動・生計・アイデンティティ』(世界思想社、2007 年)、364 頁＋vi、(第 24 回大平正芳記念賞受賞)

６．研究組織
(1)研究代表者
関　恒樹 (SEKI KOKI)
広島大学・大学院国際協力研究科・助教
研究者番号：30346530

(2)研究分担者

(3)連携研究者